

## 言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 馬場 智一  
論文題目 倫理の他者、レヴィナスにおける異教概念  
—語源、概念史、ハイデガー受容の観点から—  
論文審査委員 鵜飼 哲教授 土岐 健治教授 藤野 寛教授

### 1 本論文の構成

本論文は20世紀フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスの思想を、その異教概念を導きの糸として、主としてハイデガー受容の側面から検討したものであり、文献学、思想史、哲学の諸領域にわたる学際的な研究である。

本論文は次の各章から構成される。

### 序論 本論文の課題と意義

#### 第一部 「異教徒」、翻訳史と語源論争

1. 考察の対象となる翻訳／解釈の歴史について
2. タナッハにおける‘AMとGOJ
3. 七十人訳聖書における‘AMとGOJの曖昧さの修正
4. 新約聖書-キリスト教徒、ユダヤ教徒、異教徒
5. ラテン語における異教徒概念の変化-ウルガタ訳と非聖書的背景

#### 第二部 西欧精神史における異教批判の歴史

1. 第二部の概観
2. 前史：不道德な神々の批判と自然神学批判（プラトン）
3. 聖書に見られる異教批判の基本的議論
4. 古代護教論
5. 護教論の変化と異教概念の形式化
6. 啓蒙以後の宗教論の変遷と異教概念の変化
7. ドイツにおける再形而上学化された宗教論における異教小括

#### 第三部 レヴィナスにおける異教概念

1. 護教的パガニズム概念の受容？—レヴィナスとマリタン
2. 了解とは別の仕方—異教教的実存様態の対蹠点

3. 存在者の文明論的諸様態—ユダヤ、キリスト教西欧、異教
4. 異教の両義性
5. 「パガニズムの危険」の消失と非場所の思想
6. 補論 自然法とノアの命法—レヴィナスにおける自然概念（の不在）とその帰結
7. 結論
8. 範例
9. 参考文献
10. 詳細目次

## 2 本論文の概要

序論では、本論文の主要な課題が、ハイデガーのもとに留学しその思想のフランスへの紹介によって哲学者としての経歴を開始したレヴィナスが、『存在と時間』は高く評価しながらも、後期ハイデガーの思想についてはこれを「異教崇拜」(paganisme)として厳しく批判した根拠にかかわる問いであることが明示される。デリダのレヴィナス論「暴力と形而上学」(1964)はレヴィナスのハイデガー理解の不備を的確に指摘していたが、「異教崇拜」という概念の由来には触れていない。レヴィナスがどのような意図でこの概念に訴えたのかを正確に理解するために、著者は、西洋思想史上における異教概念の文献学的、思想史的探索を出発点に、レヴィナスのナチズム理解の、1930年代の思想史的コンテクストにおける位置づけ作業を経て、初期から中期の著作の内在的検討へと進んでいく、本論文の主要な道程を提示する。

第一部では、異教概念の文献学的検討が、翻訳史および語源論争史の記述を通して行われる。現代フランス語で異教徒を意味する *païen* の語源はラテン語 *paganus* であるが、この語は5世紀前半に、それまでキリスト教会で用いられてきた *gentes* や *gentiles* に代わって文書中に登場する。これらの語は七十人訳聖書に遡るギリシャ語 *ethnè* の翻訳であり、この語はまたヘブル語の *gōjīm* の訳語である。タナッハ(旧約聖書)では<民>を意味する二つの語、*‘ām* と *gōj* の区別はまだ完全に相互排他的ではないが、バビロニア捕囚以後の諸文書ではユダヤ人を前者、他集団を後者によって指示する方向での一貫性がより顕著に認められる。

*paganus* の文献上の用法は紀元前一世紀から確認されるが、異教徒ではなく、*pagus* (都市に対する地方、田舎)の住人を意味していた。ここから、キリスト教がその初期に都市で普及したのに対し、田舎の住民が異教徒にとどまっていたために *paganus* が異教徒を意味するようになったとする後年の説が生まれた。19世紀末に起こった語源論争では、この説に対し、キリスト教徒を「神の兵士」とする自己表象との対比で *paganus* を「文民」と解する説が現れたが、その後、「集団に属さない者」を意味するとする第三の説が提示され、これが現在では定説となっている。

この語源論争の過程では、*paganus* が *gentes* /*gentiles* に取って代わった歴史的背景も明らかにされた。410年のゴート人によるローマ侵攻をきっかけに、異教を奉ずるローマ知識人からのキリスト教批判が盛んに行われ、それに対する護教論的要請からアウグスティヌスが『神の国』

を著わし、さらにアウグスティヌスの勧めでオロシウスが『異教徒に抗する歴史』を書くに至る。この書物以降、異教徒の意味での *paganus* の使用が一般化していった。

第二部では、西洋における異教概念の変遷が、前史としてのギリシャ思想、聖書本体の議論、古代護教論の成立、中世、宗教改革、啓蒙期を経て、19世紀ドイツのロマン主義およびそれ以後の哲学的宗教論に至る諸段階に即して辿られる。旧約聖書における偶像崇拜の概念は天体崇拜をもその批判の対象とする点で、プラトンにみられるギリシャ的な天体神学の批判と通底する。新約聖書、とりわけ「ローマの信徒への手紙」には、人間は被造物である世界を通して創造者である神の存在を知るべきであるが、それに反して被造物を崇拜する誤りは、神が人間に与えた罰であるとする思想が見られる。それとともに、異教批判にもう一つの論拠を提供するのは終末論であり、最後の審判ののち異教徒はその不信心に見合った罰を受けるとされる。しかし、他方でキリスト教は、異邦人＝異教徒に対する伝道を重視した。そのなかで、聖史における異教徒の運命を説明する目的でパウロが用いたのがオリーブの接木の譬喩である。この譬喩によれば、ユダヤ人は本来の樹であったが不信心に陥ったため枝を切られ、そこに野生の樹である異邦人が接木された。しかし、そのユダヤ人も終末に至って再び接木されることになる」とされる。

古代護教論はアレクサンドリアのユダヤ共同体におけるヘブライズムとヘレニズムの融合にその思想的な起源を有し、聖書外典の『ソロモンの知恵』やアレクサンドリアのフィロンに見られる天体、自然原理の崇拜に対する批判は、やはりアレクサンドリアで活動したギリシャ教父アタナシオスが、当時なおローマ帝国の迫害下にあったキリスト教擁護の目的で執筆した著作にも共有されている。キリスト教の国教化ののちは、ゲルマン諸族の帝国領侵入が新たな護教論の歴史的文脈を形成する。そのなかから生まれたアウグスティヌスの『神の国』では歴史は「地の国」と「神の国」の対立によって説明され、終末論的ヴィジョンに即して、最後の審判ののち、キリスト教会が体現する「神の国」の民には至福が、「地の国」の民、すなわち異教徒には「永遠の劫火」が待っているとされた。

中世のラテン・キリスト教世界では身近に異教徒が存在しなくなったため護教論的異教批判は後景化し、トマス・アクイナスの『反異教徒大全』では、用語法は教父に従いながらも、「異教徒」(*gentiles*) に対する批判の鋒先は主としてギリシャ哲学に向けられている。宗教改革期に異教批判は新たな様相を帯びる。ルターはカトリック教会に対しても、またユダヤ人に対しても *gentiles* という語を差し向けた。ここで異教概念はユダヤ＝キリスト教とそれ以外の宗教という対立を超え、「真の宗教」とみなされた信仰の本質を外れるあらゆる宗教形態を包含することになる。カントはこの関係を A と非 A の対立として定式化し、キルケゴールはその原罪神学において、異教徒をこの対立の外部に置くことで、その他者性をさらに徹底させた。

宗教改革以後、キリスト教内部で偶像崇拜の起源についての関心が高まり、カトリックでは大洪水以前に、プロテスタントではマイモニデスに拠りつつ大洪水以後に起源が求められた。啓蒙主義の理神論は起源論を聖書積義から切り離し、ここに多神教としての異教の表象が成立する。チャーベリーのハーバートは多神教の根底に唯一神の存在を見る普遍的一致説を唱え、ケンブリッジの新プラトン主義者カッドワースは啓示に代えて唯一神を「生得観念」とみなした。一方ヴォルテールは、あらゆる宗教を通じて真理は賢者によってのみ伝承されていると考え、偶像崇拜

とみなされている諸宗教においても、賢者は唯一神を崇拝していると主張した。さらにヒュームは多神教を原始宗教と考えて一神教への発展説を唱え、ドゥ・ブロスとは同時代の他文明の宗教を「原始的段階」にあるものとみなした。ここに西洋の異教言説の、人類学的、比較宗教学的考察への転回の萌芽を見てとることができる。

18世紀後半以降、古代異教そのものを評価し、古代文明の優位を主張する思想がロマン主義のなかに登場する。ヘルダーは独自のスピノザ解釈を通して自然史と人類史の連続的な理解を試み、古代宗教のうちにもキリスト教と同じ人間性の理念が別様に表現されているとした。ヘーゲルの宗教哲学もまたヘルダーの歴史観を前提としているが、精神がみずからを外化して自然となり、概念の運動としての歴史を通して自己に還帰すると考える点で区別される。『宗教哲学講義』で論じられる「異教」にあたる「自然宗教」「絶対宗教」「啓示宗教」としてのキリスト教に至る過程の諸契機として位置づけられる。また、後期シェリングの異教理解は、カバラやペーメなどの神秘主義に想を得つつ、通常の歴史を超える「高次の歴史」の観点から宗教を思考する。このとき異教はキリスト教の準備をなすものと位置づけられ、多神教はキリスト教の啓示の可能性の条件とみなされる。神それ自体は超自然的潜勢力であり異教的神話は自然的潜勢力であって、開示する啓示宗教と隠蔽する自然宗教は単一の運動の二つの側面とされる。ドイツを中心としたこれら19世紀の異教言説には、キリスト教の特権的地位は維持されながらも、従来は存在しえなかった多様な異教評価の試みが認められる。また、啓蒙主義に発する諸潮流は西洋の他者である信仰形態への関心として、のちの宗教学、人類学へと発展していく。

第三部では、以上の考察を踏まえて、レヴィナスの異教批判の内在的な理解が試みられる。まず1930年代には、ドイツでナチスが台頭し、フランスでも反ユダヤ主義的風潮が強まるなかで、当時の有力なカトリック哲学者ジャック・マリタンが独自の反ユダヤ主義批判を展開し、レヴィナスはこれに共感する姿勢を示す。マリタンは人種主義を血の崇拝とみなして、キリスト教の精神に叛く新たな異教(paganisme)と規定する。レヴィナスは世界および自己の存在を「自然」とみなしえないユダヤ教と、マリタンが理解するようなキリスト教の精神の間に同盟関係を見出したのである。ここにみられるのは、政治状況に規定された、護教論タイプの異教批判であると言える。

他方でレヴィナスは、ハイデガーの批判的受容を通して、ユダヤ教、キリスト教西洋、異教についての存在論的概念を練り上げていた。そのとき異教は、世界から抜け出すことの不可能性を意味し、ハイデガーが『存在と時間』で提出した世界内存在としての現存在の概念がこの範疇に即して理解された。「マルティン・ハイデガーと存在論」(1932)でレヴィナスは、ハイデガーの世界概念が現存在中心の構造を備えており、現存在の自己の存在への関心の様態が「存在了解」として特権化されていると主張する。それに対してユダヤ的存在様態においては自己の存在への関心は中心化されえず、おのれの存在に絶えざる違和を覚える。レヴィナスは『存在と時間』の情態性の分析を高く評価する一方で、存在への「釘付け」という情態性によって特徴づけられるユダヤ的存在様態とハイデガー的現存在の差異を強調する。

「逃走について」(1935)から『実存から実存者へ』(1947)でレヴィナスは前主体的なものの現象学的分析を試みるが、そこで扱われる嘔吐、恥、不眠、疲労、怠惰といった情態性は、す

べて、ハイデガー的現存在の存在「了解とは別の仕方」にある存在様態の記述である。そしてこのとき「睡眠」の経験は、現存在そのものの「了解構造」を可能にする基体化と規定され、身体を獲得する出来事として捉えられる。

ハイデガーのナチズムへの加担を知ったのちの戦後において、異教批判としてのレヴィナスのハイデガー批判は厳しさを増すが、そのとき *paganisme* は農民 (*paysan*) 的な風景 (*paysage*) の思想と規定される。後期ハイデガーが展開した、天と地、神々と死すべき者たちからなる四者行域としての世界の思考は、このような語源説に基づいて、土地への根付きとして再解釈される。異教概念の歴史に照らすならば、このような異教批判は明確に護教論的系譜に属するものであり、現在では否定されている語源説に基づいている。

しかし、このような異教の全面否定は、第一の主著『全体性と無限』(1961)において 微妙なニュアンスを帯びる。シュテファン・ローゼンツヴァイクの『贖罪の星』ないしはこの書を経由したシェリングからの影響を受け、『全体性と無限』にはカバラ的な神の収縮の観念が導入される。他者による自我の審問が成立する前提条件として自我がおのれの中心へと向う運動、すなわち自我の収縮が想定され、この収縮をレヴィナスは主体の「無神論」と呼ぶ。『実存から実存者へ』で記述された「睡眠」の経験を一般化することによって得られた「享受」の概念が、この「無神論」、すなわち「他者なきエゴイズム」を説明する。「享受」は主体の独立を可能にするが、それ自体は環境世界としての「元基態」に依存している。「元基態」とは自然の諸要素のことであり、レヴィナスはここで主体が冒す危険を、後期ハイデガーの世界崇拜の危険と明らかに重ね合わせている。だがここではこの「危険」は冒すべきものとして積極的に位置づけられており、その点にレヴィナスの異教言説が伝統的な護教論に対して持つ独自の運動が認められる。

享受の主体は未来における享受の不可能性を恐れて元基態の「神々」に従属するが、一方「無神論」には自己の生存すら配慮しない可能性が秘められている。ここにレヴィナスは、ハイデガー的現存在に本質的な、存在了解の構造を破壊する可能性を見ていると考えられる。30年代以来レヴィナスにとって「異教」とはこの存在了解の構造への固執であったことを踏まえるならば、「享受」には異教への従属とその破壊という二重の可能性がはらまれていることが理解される。このことと相即的に、「無神論」に対してレヴィナスが「宗教」と呼ぶ他者への責任も、後者による前者の単純な否定ではなく、両者は表裏一体の関係にある。そこには一方では後期シェリングの異教言説にみられた自然と超自然、隠蔽と啓示、異教とキリスト教の関係と同型的な相互規定性が想定されており、他方ではキルケゴールにおけると同様、異教的「享受」は、「無神論」と「宗教」に対して外在的に位置づけられている。しかし、『全体性と無限』ではこの総体が、倫理の可能性の条件とみなされていることに変わりはない。

このような異教の危険の必然性の思考は、レヴィナス思想の後の展開においては後景化し、「享受」の経験の地平であり積極的な意義を担っていた「住むこと」のモチーフも、『存在するとは別の仕方』では土地への根付きとみなされていく。このようにして異教をめぐる議論はレヴィナスの哲学的著作から姿を消すが、1980年代に至って、イスラエル国家とエルサレムをめぐる政治的発言のなかに、この土地への根付きの危険は微妙な形で再来する。かつてあれほどきびしく批判した異教的存在様態、土地の風景への肯定的参照がレヴィナス自身の筆のもとに現れる

とき、彼にとってのこの概念の重さがそれだけいっそう際立つことになる。

補論では、レヴィナスの異教批判の背後にある自然概念への深い懐疑を動機づけたものが、レヴィナスの自然法批判の検討を通して論じられる。ハイデガーの存在了解の思想はレヴィナスにとって、存在の努力を意味するコナトゥス・エッセンディと同質のものと考えられていたが、これと同じ発想が彼の自然法・自然権批判にも通底している。レヴィナスが自然権思想に対置するのはそれに先行しそれを基礎づけると彼が考える「ノアの命法」である。「ノアの命法」とは、タルムードにおいて、大洪水の後にノアに与えられたと考えられている七つの命令である。イスラエルの民に向けられた十戒とは異なり、ノアの命法はセム、ハム、ヤペテの父であるノアに与えられたことから、人類全体に向けられていると考えられ、ユダヤ人以外の者がこの命法に適用する場合、「有徳の、敬虔な異邦人」と見なされる。近代自然法の形成過程でも、グロティウスやセルデンは「ノアの命法」に言及しておりレヴィナスと共通のモチーフも見られるが、「ノアの命法」から自己保存の衝動とは異なる主観性原理を導こうとする点にレヴィナスの独自性がある。

レヴィナスにとって普遍性とは「多様なものの同化」ではなく、イスラエルという中心から放射状に広がる「人間への愛」を意味する。それは少なくとも潜在的に他の自由の否定でありうるような個人的自由をもって、人権の根拠とはみなさないということである。こうしてレヴィナスは他者への応答可能性を平和と人権の基礎とするのだが、それは彼にとって自由の制限ではなくむしろその保証をなすものである。

結論で著者は、以上の作業を踏まえて、レヴィナスの異教批判について、その護教論的性格、ハイデガー批判の妥当性などの諸点をあらためて振り返り、『全体性と無限』においては少なくとも確認された倫理の条件としての異教的存在様態の意義を確認し、レヴィナス哲学理解における異教概念の重要性を再度強調して論を閉じる。

### 3 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、まず第一に、国際的なレヴィナス研究のなかでこれまでまったく取り上げられることのなかった異教概念に着目し、ギリシャ語、ヘブル語、ラテン語の文献を労を惜しまずに調査して概念史的検討を行い、それを踏まえてレヴィナスの異教批判の性格について十分な説得力を備えた結論に到達した点である。この点は研究史上に大きな意義を持つ、優れて独創的な貢献であると言って過言ではない。

第二に、1930年代のヨーロッパの政治情勢、フランスの思想状況のなかで、カトリックの哲学者ジャック・マリタンとレヴィナスの思想的共闘を掘り起こし、キリスト教とユダヤ教それぞれの立場からする、ナチズムの人種主義的反ユダヤ主義に対する批判の構造を分析して共通点と相違点を明らかにした点である。反ユダヤ主義に対するキリスト教とユダヤ教の思想的共闘がすでにこの時代に見られたことは、フランスの思想界でもこれまで論じられる機会が少なく、二〇世紀精神史の読み直し作業への貴重な貢献とみなすことができる。

第三に、レヴィナスのハイデガー受容について従来の定説を問い直し、異教批判という視点から、初期の現象学的探求のうちに、『存在と時間』に対する系統的批判の論脈を跡づけ、それと

ともに、第一の主著『全体性と無限』における「元基態」概念の、レヴィナスの思想的発展における特異な性格を浮き彫りにした点である。この点はレヴィナス哲学の重層的な理解に新たな道を開いたものと評価しうる。

とはいえ、本論文にもいくつかの問題点は存在する。

第一に、文献学的調査の部分にかなりミスが目立ち、それとともに、宗教史上の記述にいくつかの誤りが含まれていることである。著者が自らに課した作業の膨大さを思えば無理からぬ点もあるが、論文の細部をさらに精密に仕上げる努力が望まれる。

また、第二に、本論文の文献学、思想史研究的側面と、哲学研究的側面とが、レヴィナスの著作の理解の深化に資する方向で、かならずしも十分有機的に結合されていない印象を受ける。前者の作業に多くの時間を必要としたためと思われるが、今後はレヴィナスの著作自体の分析により重点を置いたアプローチが求められよう。

しかし、これらの問題点は、本論文が全体として達成した成果にくらべれば瑕瑾に類するものであり、その価値を大きく損なうものではない。本論文が、著者の今後の活躍をおおいに期待させてくれるすぐれたものであることにはかわりはない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。

## 最終試験結果要旨

2008年6月11日

受験者                    馬場 智一  
最終試験委員           鶴飼 哲 土岐 健治 藤野 寛

2008年5月22日、学位請求論文提出者 馬場智一氏の論文および関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「倫理の他者、レヴィナスにおける異教概念—語源、概念史、ハイデガー受容の観点から」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、馬場智一氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、馬場智一氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。